

講演：西洋文化におけるラグジュアリー

印刷博物館館長 樺山紘一

LECTURE: LUXURY IN WESTERN CULTURE

Koichi KABAYAMA, Director, Printing Museum

Both in the West and the East, “sumptuary laws” have often been legislated since ancient times. The reasons advanced for enactment of such laws were said to be social class control, social rationality and the economic principle (extravagance reduces personal capital and leads to a decrease in social capital). M. Weber’s idea of “frugality” gave a theoretical backbone to this concept. He argued that saving money and investment of surplus capital into industries would develop the capitalist system and ultimately benefit the whole society. Against this, W. Sombart put forward a new theory that “luxury” and “love affairs” would promote the development of capitalism. He asserted that exchanging gifts and dressing up would vitalize the industries. On the other hand, N. Elias advocated the view that society is not driven forward by rational economic activities only, but that “regulation” such as manners and etiquettes including “courtesy,” which was established in the society at the imperial court, was also one of the factors that enriched the society. J. Huizinga newly insisted that play represented the rules which human beings mutually agreed upon, and that the society was formed on the basis of those “rules of play,” not of social status or financial matters.

Luxury can not be defined simply by the rational economic activities. Love affairs, courtesy and play are also deeply related to lives of luxury. It is necessary to verify the possibilities in these factors once again.

「luxury (ラグジュアリー)」という言葉は、あまり日本語として熟している言葉とは言いにくいかもしれませんが、英語です。「lux (ルックス) =光」というラテン語から派生した言葉だそうでした、文字どおり光ある、輝きある暮らしとか、それを体現する人々というような意味で使われてきた言葉ではないでしょうか。

「ラグジュアリー」の日本語にあたる「贅沢」や「奢侈」といった言葉は、これまで私たちが日常で用いると、少し後ろ向きな、ネガティブな意味合いもありました。しかし、これからお話しする事柄、あるいはKCIの展覧会「ラグジュアリー：ファッションの欲望」で取り上げるテーマも含めてお伝えしたいことは、贅沢で何が悪いのか、ということです。むしろ、私たち人間は、贅沢とか奢侈とかいった事柄をもう少し前向きにとらえて、私たちの生活や社会の決まり事に上手に適合するような贅沢な仕方、奢侈のあり方を考えようではないか、とりわけファッションを含む人々のなりわいといったものを本格的に考え、人間文化、あるいは日本文化、西洋文化の中でラグジュアリーをもっと大事なものとして考え直すのではないかと、という趣旨でもあろうかと思えます。

ラグジュアリー、贅沢や奢侈といった事柄はどういうものか、着る物、あるいは生活全般にわたる「lux」、文字どおりの〈光、輝きがある〉暮らし、生活のあり方、なりわいというのは一体どういうものかとい

うことを考えてみましょう。「ラグジュアリー」という言葉自体がヨーロッパで始まりましたので、差し当たりヨーロッパを中心にお話します。

これを考えるのにいろいろな理屈を立てますと、随分頭も痛くなりますので、こんなふうな糸口で見たらどうだろうかという、私なりの提案を申し上げたいと思います。

1. フラゴナールと優美な奢侈

近世ヨーロッパにあって、奢侈ということを考えるために、もっとも相応しい事例として、画家フラゴナールの作品を取り上げてみましょう。1732年に生まれ、1806年に没したフランス人画家です。ロココ時代を代表します。

(以下、フラゴナールの代表作を、奢侈という観点から選んで紹介した。ここでは、紙幅の都合から、収録することを控える。フラゴナール作品から、奢侈という主題にかかわる側面について、紹介した項目のみを列挙しておく。

1. 煌めく官能 (Fig. 1)
2. 疼く欲情 (Fig. 2, 3)
3. 衣装としぐさ (Fig. 4)
4. 雅の遊戯 (Fig. 5)
5. 囲われた祭り (Fig. 6)
6. 温もりの家庭と子ども (Fig. 7, 8)
7. 庭園としての森 (Fig. 9)

いずれにせよ、18世紀フランスの宮廷や市井にあって、フラゴナールが描いた情景は、現実を超えて、人々が理想とした奢侈の光景を表現していたものと考えられる。)

2. 近代社会と贅沢の関係を考える

a. 奢侈禁止令と経済原理

実は長い間、ヨーロッパでも日本でも、この「ラグジュアリー（奢侈、贅沢）」という言葉は、決して褒められた言葉ではありませんでした。かつてわが国でも「贅沢は敵だ」と言っていました。後に人々は逆に、「贅沢は素敵だ」という標語を使ったりしましたが、もともとは否定的意味が強くありました。

奢侈は、人間社会において、本当はあってはいけないと言われたけれども、実際には、誰もが贅沢で奢侈のある生活をした欲求を持っています。一方で、それは社会的には認めにくいという規制があり、両者の間にいつもせめぎ合いがありました。

「奢侈禁止令」が、実は洋の東西を問わず、ヨーロッパでも日本でも中国でもどこでも、繰り返し繰り返し出されてきました。しかし、なぜ、贅沢をするなど言うのでしょうか。自分のお金でやっているのだから勝手じゃないか、というのが本音のところでしょう。ところが、あらゆる社会で、常に法律や条令などによって贅沢が禁止されたわけです。何度も出されるということは、いつもみんな贅沢していたということなのですが、にもかかわらず、執拗に禁止令が発布されたのです。

それは、主には身分規制と呼ぶものに基づきます。贅沢をするのは貴族であつたらある程度のことはいいけれども、平民や農民はいけないというように、身分に反することだという理屈をつけたわけです。贅沢をしすぎてはいけないということで、奢侈禁止令が出されてきました。

しかし、それはなかなかうまくいかないもので、自分のお金でやるのだからおれの勝手だろうという

考えが出てきますし、身分規制という考え方に説得力が失われていきます。そうすると代わりに、社会的合理性とか経済原理とかいったことが問題になります。つまり、不必要な物を着たり、不必要な物を食べたり、不必要に大きな家に住んだり、贅沢をしすぎると、自分のお金なくしちゃいますよ、貧乏になりますよ。そうなったら、あなたも困りますよ、全体として社会も困りますよ、世の中に迷惑をかけますよ、という理屈です。社会的に合理性のある暮らしをしなさい、と社会は、とりわけ当局権威や権力は人々に求めるようになっていきます。今でも常識的にはそうかもしれません。

b. 節儉か恋愛か：資本主義の仕掛け人

ところが、ある時にドイツの著名な社会学者マックス・ヴェーバーが、新説を唱えます。そもそも贅沢をやめようではないか、節約をして儉約をする「節儉」の生活をすれば、それは、プロテスタンティズム、主にカルヴァン派のプロテスタンティズムが人々に教えた生活倫理であります。ギャンブルなんかしないで真面目に労働し生活していけば、その中から資本主義というものが合理的に出来上がっていくのだ、という説明をしました。

長い間わが国でも、このマックス・ヴェーバーの説明はそのとおりだと思われてきました。みんなが少しずつ節約をし、残ったお金を産業に投資し、そして資本がどんどん大きくなっていった社会は発展する、と考えました。反奢侈論は、こうして理論的な支えを受け取ります。その中では贅沢とか無駄遣いというものはない。節約して儉約した生活が社会を進展させると考え、私たちも時々贅沢ばかりやっている人間をつかまえて、「あなた、そんなことをやっていると、自分も困るが社会も困るよ」と言ってきたわけです。

それに対して、「いや、全然違う」と言った人がいます。ヴェルナー・ゾンバルトというドイツ人です。近代の資本主義ができたのは、何よりも、贅沢とか恋愛とかいった、それ自体は健全な経済に反するかのようない行いが、実は社会を近代化させ資本主義を作ったのだと、かなり逆説に聞こえるかもしれませんが、そのようにゾンバルトは論じます。ゾンバルトは、もちろん多少の逆説を含んでのことですけれども、男と女がお互いに恋愛をすることで、贈り物をしたり、着飾ったり、時には別れて慰謝料を払ったりも含めて、お金が社会の中を動き回ることが近代の資本主義を作ったのだと説明しました。

当たっているかどうか別にして、この説明は大変多くの人々に衝撃を与えました。つまり、みんな儉約して無駄使いをしなければ社会が発展すると思ったのに、いや、そうじゃない、と言うのです。男と女が恋愛をやって、不要にもみえる贈り物をお互いに贈り合って、これでもって産業は確かに活気づいた。男も女も次々と新しくファッションを開発することで、実は装飾具産業も繊維産業も発展していった。宝石産業もそうだ。そう考えることもできるのだ、と。随分みんな半信半疑だったかもしれないけれども、こう考えることもできます。

c. 宮廷と市井の文化：儀礼と遊戯の役割

それだけではありません。贅沢、奢侈だけではなくて、みんなが真面目に働いて、合理的な計算をして、

これで社会を近代化させることができると考えたのに、そうではないところがあると言う人が他にもいます。

例えばノルベルト・エリアスというドイツの社会学者はこう考えました。みんながお互いに自分の判断で経済活動をやっていくのが理想だろう。しかし、実際に人々の生活の中には、お互いの間で合意されている「儀礼」というものがある。「礼儀」はもう少し個人的な行いのことで、それがみんなでお互いに合意されると「儀礼」ということになる」と説明されますが、エチケット、特にマナーに関してです。

人と人之间にはお互いを結ぶ規則があって、その規則はなにも権力や法律で作りに上げたのではなく、人間がお互いに相手との間で合理的に、あるいは優雅にやっていくために、いろいろなマナー、エチケットを制定してきたのです。かつてヨーロッパでも昔は平気で鼻をかんで、床に飛ばしていましたが、ちゃんとナプキンでぬぐいなさいとか、食事をする時に手で口に運んではいけないからフォークで持ってきてなさいとか、今考えれば当たり前のことですが、そういったいろいろな規制がマナーとなって、お互いの間で合意されるようになります。それが次第に礼儀から儀礼にまで発展し、社会をつくり上げていったのだ、と解説されます。

そういう社会は一番典型的にどこで生まれたかという、エリアスによれば、宮廷社会です。宮廷でいろいろなマナーが開発され、そしてそのマナーは、やがては社会全体の中に広がっていく。これをつくり出した宮廷が、生活の豊かさとおわせて、その国の人々の社会の基本的なルールを決めていったのだと、そこに注目しようではないかと言いました。

ついで、ヨハン・ホイジンガというオランダの歴史家がこんなことを考えました。宮廷や人々の間で支配しているのは、経済原則や政治権力なんていうものだけではないかもしれない。遊びのルール、遊戯のルールというものがある、この遊戯は直接にはお金につながったり損得につながっていったりするよりは、むしろお互いがみんな共同で合意し合ったルールなのだ。一定の場所で遊びをやり、勝ったり負けたりする。それが一旦終わると、また元に戻ってもう一度やり直す。社会が身分関係や金銭関係などではなくて、端的に言って遊びによって構成されているのだと。この遊びはいろいろな場所で起こってくる。もちろんお祭りの場所でも宮廷社会でも、戦争ですら、一定の遊びがある。ホイジンガはこう述べました。

恋愛や儀礼や遊戯といったものは、もちろん社会の中でお互い人間が少しずつ創り上げてきたものですが、それはあらましどこでも、宮廷社会あるいは宮廷社会とつながった市井、都市的な生活を送る人々によるものでした。そうであれば、最初に述べたように、みんなが節約すれば近代社会が生まれるというものでもない。そう考えざるをえません。

さて、最初にごらんいただいたフラゴナールの作品は、もちろん18世紀の現実の社会を描いたものではないかもしれませんが、そこに現れたのはさまざまな贅沢、奢侈の生活でした。男と女、男女の間の、時にはだまし合いがあったり、時にはじらし合いがあったりするけれども、とにかく恋愛関係があり、そして、それを支えるような官能や欲情といったものがある、それが人々の生活をより楽し

くしていったし、また時には贅沢、奢侈として物をつくり上げていきました。

そればかりではありません。遊びだとか遊戯だとか祭だとか、それからいろいろな種類の衣装だとかしぐさだとか、そして庭園だとか森だとか、こうしたもの全体はみんなどれも実際には経済生活に不必要なものなのかもしれない。しかし、そうしたいろいろな贅沢な遊びや儀礼や恋愛のだまし合いといった豊かな生活の中から、実は近代社会は生まれてきたのかもしれないと考えられます。

3.光輝 (lux) をもって生きること——ラグジュアリーのコア

さて、ラグジュアリーの語源である「lux」、つまり光を持っているということは、なにも顔をてかてかに塗りたくるとか、あるいは、高価な物を身につけて相手との間で価格争いをするとかいったことだけではないでしょう。もっと広く、恋愛だとか、遊戯だとか遊びだとか、祭だとか、時には儀礼、エチケットだとかマナーだとか、そうしたもの全体の中でもって人々の生活を豊かにしていこうじゃないかという、そういう社会の人々の合意の中から生まれてきたのだと思います。

恋愛と儀礼と遊戯。これらはみな、^{ラグジュアリー}贅沢の生活と深い関わりがあります。ヴェルナー・ゾンバルト、ノルベルト・エリアス、そしてヨハン・ホイジンガが説明してきたように、こうしたものが持っている可能性を、私たちは改めて検証し直す必要があるのではないかと考えます。

フラゴナールはその作品の中で、当時の人々の理想としての贅沢な生活を描き出しました。その中に再検証の可能性が現れます。フラゴナールはそう意識したかどうかわかりませんが、当時の宮廷の人々、市井の人々と共に、贅沢な、豊かな生活とは何かを考えたい、こう提唱したに違いありません。

私たち現代人は本当にラグジュアリーな生活ができるだろうか。時には豊かな衣装をつけ、豊かな表情やしぐさをとるだろうし、恋愛や儀礼、あるいは遊び・遊戯……。こうしたもの全体が光り輝くこと。要するに「lux」を持つことでもって、私たちは改めて贅沢というものの意味を考え直すことができるのだと思います。

私はフラゴナールの絵を通してラグジュアリーというものの意味を考えたらどうだろうかと申し上げましたが、もちろんそれ以外のいろいろな方法があります。歴史の中を探ることもできるし、あるいは、私たちが知らない世界でもっと豊かな贅沢が行われている世界もあるかもしれない。そうしたものを通して、現在の中で、新しいラグジュアリーの考え方を掘り起こしていくことができるに相違ありません。

(本稿は、2008年12月12日に開催した「ラグジュアリー：ファッションの欲望」展プレ・セミナーでの講演を編集したものである。)

〈図版〉

Fig. 1 J・H・フラゴナール《ぶらんこの絶好のチャンス(ぶらんこ)》1767年頃 ロンドン ウォーレス・コレクション; J. H. Fragonard, *Hasards heureux de l'escarpolette*, c. 1767. The Wallace Collection, London.

Fig. 2 J・H・フラゴナール《水浴の女たち》1765-72年頃 パリ ルーヴル美術館; J. H. Fragonard, *Les baigneuses*, c. 1765-72. Musée du Louvre, Paris.

Fig. 3 J・H・フラゴナール《待ち望んだ瞬間》1767-71年頃 個人蔵; J. H. Fragonard, *L'instant désiré*, c. 1767-71. private collection.

Fig. 4 J・H・フラゴナール《マリー＝マドレーヌ・ギマルの肖像》1769-70年頃 パリ ルーヴル美術館; J. H. Fragonard, *Portrait de Marie-Madeleine Guimard*, c. 1769-70. Musée du Louvre, Paris.

Fig. 5 J・H・フラゴナール《目隠し鬼の支度》1770-78年頃 パリ ルーヴル美術館；J. H. Fragonard, *Les apprêts du colin-maillard*, c. 1770-78. Musée du Louvre, Paris.

Fig. 6 J・H・フラゴナール《サン＝クルーの祭り》1775年頃 パリ フランス銀行；J. H. Fragonard, *La fête du Saint-Cloud*, c. 1775. Banque de France, Paris.

Fig. 7 J・H・フラゴナール《歩きはじめ》1786年頃 ケンブリッジ フォッグ美術館（ハーバード大学美術館）；J. H. Fragonard, *Le premier pas de l'enfance*, c. 1786. Fogg Art Museum, Harvard University Art Museum, Cambridge.

Fig. 8 J・H・フラゴナール《親の居ぬ間に》1765年 サンクトペテルブルク エルミタージュ美術館；J. H. Fragonard, *Absence des père et mère mise à profit*, 1765. The State Hermitage Museum, St-Petersburg.

Fig. 9 J・H・フラゴナール《冠を受ける恋人（恋人の戴冠）》1771-73年頃 ニューヨーク フリック・コレクション；J. H. Fragonard, *Amant couronné*, c. 1771-73. Frick Collection, New York.

〈関連文献〉

M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1904

W・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』1922

N・エリアス『文明化の過程』1969

J・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』1938

樺山紘一（かばやまこういち）

1941年、東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。専門領域は西洋中世史、西洋思想文化史。東京大学文学部教授、国立西洋美術館長を経て、2005年10月より現職。東京大学名誉教授。主な著作に『ゴシック世界の思想像』（岩波書店）、『カタロニアへの眼』（刀水書房）、『西洋学事始』（日本評論社）、『情報の文化史』（朝日新聞社）、『異境の発見』（東京大学出版会）、『ルネサンスと地中海』（中央公論社）、『肖像画は歴史を語る』（新潮社）、『エロイカの世紀』（講談社現代新書）、『地中海一人と町の肖像』（岩波新書）、『旅の博物誌』（千倉書房）、『歴史家たちのユートピアへ』（刀水書房）など多数。

（※肩書は掲載時のものです。）